

# 知って当たり前 介護ガイド帳



上原 喜光

最初は簡単な身体介護から始まるが、やがて認知症で徘徊したり、オネシヨもするようになる。

これも、震災の影響でかき消されたニュースのひとつだろう。

警察庁が、昨年の自殺者数を3万1690人と発表した。前年比3.5%減だが、13年連続で3万人を超えたことになる。年間の交通事故死が5000人を割っている今、改めて自殺者の多さに驚かされる。

全体では減ったとはいえ、「介護・看病疲れ」が原因の自殺者は前年比11%増の317人。60代が約30%で突出し、70代が約23%で続く。

自分の周囲を見渡せば分かるが、60代は自分の両親が要介護になる頃で、70代は伴侶の世話をしている人が多い。老老介護に悩み、自ら死を選ぶことになる。

しかも、男性介護者の自殺が多い。男性による介護は全体の3割に過ぎないが、自殺者は55%になっている。男は他人に頼ろうとせず、また頼れない人が多く、地域から孤立してしまうのだ。

介護・看病疲れによる自殺者数

年齢	男	女
19歳以下	0	0
20～29歳	3	0
30～39歳	8	13
40～49歳	15	16
50～59歳	29	35
60～69歳	56	39
70～79歳	40	32
80歳以上	25	6

※これ以外に家族の将来を悲観を理由の自殺が642件発生

男は感情移入しすぎてしまう性質があり、「お母さんはこんな人ではなかった」「俺のやり方がまずいのか」と自分を追い詰めてし

「介護疲れ」自殺がまた増加するのだ。  
「ボケたらしょうがないわね」

ある程度、女性のずぶとさも見習ってほしい。

介護保険は、家族を念頭に設計され、「施設」から「在宅」へという誘導が行われている。年間90兆円を超えた社会福祉費を減らすためだ。

家族の負担を軽減するはずの介護保険で、逆に介護疲れが増加するのは皮肉としか言いようがない。

(全国介護者支援協議会会長)